

ブラジルの風土と社会

十和田工業高校 酒 田 孝

I ブラジルという国 ―多様性と統一性―

①. 広大な国土

南米大陸の北東部に位置し、この大陸の約半分を占めるブラジルは851万1,965km²（日本の22.5倍）の面積を誇る世界第5位の大国である。北部には世界最大のアマゾン川が、アマゾン盆地の中を手を広げたような形で広がっている。中央部・東南部にかけては国土の63%を占めるブラジル高原が緩やかに起伏しながら広がっており、この地域に国民の大多数が居住している。

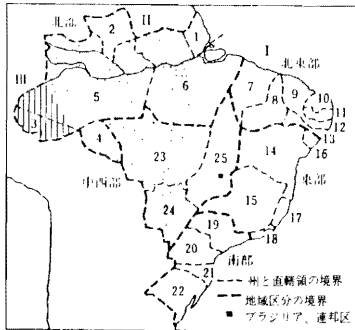
北緯5度から南緯34度までという広い範囲にまたがるブラジルは、国土のほとんどが熱帯に属するが、アマゾン地方を除くと降水量はさほど多くはない。特にアマゾン下流のすぐ南側の北東ブラジル一帯は降水量が少なく干ばつの常襲地帯であり、最近では1979年から5年間続いた干ばつがこの地域の農業に深刻な影響を与えた。リオデジャネイロなどの海岸部は年間を通して平均気温は30度前後であるが、サンパウロは標高が高いためさほど暑さは感じられず、逆に少し肌寒い日もあった。南部は温帯に属し、ヨーロッパとよく似た気候で冬には霜や雪がみられることもある。

②. 多様な国民

人口1億5,000万人以上（1990年推計）。人種構成は、白人系55%・褐色混血系38%・黒人系6%・黄色系1%といわれるが、こうした調査は主観的な自己申告によるため正確な数字は定かではないし、混血が非常に進んでいるため人種調査自体が意味を持たない。ブラジルを代表する人種はやはり褐色の膚をもつ白人と黒人の混血で、男は「ムラト」女は「ムラタ」と呼ばれる。

民族はさらに賑やかで100近い民族が混合する。中でも特に多いのがポルトガル系・スペイン系・イタリア系・ドイツ系で、原住民は19万といわれる。それぞれの移民は自分の本国と同緯度のところに住みたがるため、北部には黒人が多く、南部にはドイツ系が多い。日系人はサンパウロ州に集中している。

このように多様なブラジル人であるが、文化の面では統一性がみられる。宗教はカトリック教徒が93%を占める。有名なカルバナル（カーニバル）ももともとはこのカトリックに基づいて行われる謝肉祭である。ほかにキリスト教各派・ユダヤ教・イスラム教・仏教信者も少なくない。公用語はポルトガル語。広大なブラジル全土でポルトガル語が通用するという意味は大きい。国内各地のコロニア（入植地）ではそれぞれの民族の言語がポルトガル語と合わせて使用されている。



標準時 (I: 東部標準時, II: 中部標準時, III: 西部標準時)

図1. ブラジルの行政地域区分

NORTE (北部)

1 アマパ 2 ロライマ 3 アクレ 4 ロンドニア 5 アマゾナス
6 パラ

NORDESTE (北東部)

7 マラニャン 8 ピアウイ 9 セアラ 10 リオグランデドノルテ
11 パライバ 12 ペルナンブコ 13 アラゴアス

SUDESTE (南東部)

14 バイア 15 ミナスジェラエス 16 セルジッペ
17 エスピリットサント 18 リオデジャネイロ

SUL (南部)

19 サンパウロ 20 パラナ 21 サンタカタリーナ
22 リオグランデドスール

CENTRO-OESTE (中西部)

23 マットグロソ 24 マットグロソドスール 25 ゴイアス

II ブラジルの歴史 —ゲームとしての政治—

ブラジルはもともとインディオの土地であった。そのブラジルの現在への歩みは、1500年、ポルトガル人アルバレス・カブラルによって発見されたときから始まる。当時の国土には、赤色染料の材料となるパウ・ブラジルという木が多く生えていたために、この地をブラジルと呼ぶようになったといわれる。その後、ポルトガル人が砂糖キビを栽培し、労働力としてポルトガルから大量の黒人奴隷が連れてこられた。

17世紀末に金、ダイヤモンドが大量に発見された。その頃から、鉱脈を捜し求める人々がブラジル奥地へと進んだ。

1808年フランス軍がポルトガルに進入したため、ポルトガル王室は一時ブラジルに避難した。ブラジルはそれまでポルトガルの植民地だったが、この事件をきっかけとして、1822年、ポルトガルに帰らなかったペドロ皇太子が独立を宣言し、ブラジル帝国皇帝に即位した。

帝政は、約70年間続いたが、1889年、陸軍による無血クーデタが起こり共和制となった。その後さらに数回のクーデタを経て今日に至っている。

表1. ブラジルの略年表

1889年	無血クーデタによりブラジル共和国が誕生
1930年	青年将校を中心とするクーデタによりバルガス政権誕生 バルガスは独裁的傾向を強めていく
1945年	軍部のクーデタによりバルガス追放
1946年	ブラジル史上最も民主的な第4共和国憲法発布
1950年	バルガス再び政権につく
1954年	バルガス自殺
1956年	クビチェック政権発足
1960年	首都をリオからブラジリアへ
1964年	軍部クーデタにより、進歩的と言われたグラール政権が倒れ カステロ・ブランコ独裁軍事政権が発足 以後21年間軍事政権が続く
1984年	文民政権に移行
1989年	29年ぶりの直接選挙により40才の若きコロール大統領が誕生
1992年	コロール大統領、汚職により辞任

Ⅲ ブラジルの産業 —ブームの波—

現在のブラジルの工業化はめざましいものがある。工業製品のほとんどを自国で生産し、GNPにしめる第2次産業の割合は1984年で35%（第1次産業10%、第3次産業51%）であり、輸出の面でも工業製品の割合は今日では半分を優にこえており、しかも高度化の傾向もみられる。しかし、都市の背後に広大な農地が広がっていること、農業部門が労働人口の26.2%を吸収していること、そして下の表2などから、ブラジルでは依然として農牧業が大きな位置を占めていることもうかがい知ることができる。

表2. 世界ベストテンの中に占めるブラジル（月刊 実業のブラジル 91・10）

	農業・畜産	鉱業	工業・エネルギー	輸出入	その他
1位	バナナ オレンジ コーヒー豆 砂糖キビ	ニオブ 錫鉱石	サイザル麻 水力発電所 (ITAIPU)	飼料輸出 大豆油輸出 コーヒー豆輸出	樹園面積 日系永住者
2位	家畜牛 タロイモ カカオ 大豆	マンガン	錫地金	大豆輸出	森林面積 道路延長 在留邦人数
3位	家畜馬 パイナップル トウモロコシ	ボーキサイト	水力発電所 (TUCURUI) 砂糖		民間航空機
4位	家畜豚 養鶏 牛肉 家きん肉 葉タバコ	レアアース シリコン 鉄鉱石	水力発電量	砂糖輸出 カカオ輸出	大都市人口（サンパウロ） カリ消費 貿易収支 資本逃避
5位	鶏卵 木材伐採		アルミ 磷酸肥料		国土面積・労働者数 磷酸消費・耕地面積 海上貨量・牧場牧草地 テレビ数・日刊新聞数

このようなブラジルの産業を理解するには、ブラジルが経験してきたいくつものブームの歴史を見る必要がある。次に述べるようないくつものブームの中で、ブラジルは着実にモノカルチャーから脱却しつつある。

①. パウ・ブラジルの時代（16世紀前半）

ポルトガル人がブラジルにきた当時、ブラジルから産出したのは、赤い染料の原料であるパウ・ブラジル（pau-brasil 蘇芳）だけであった。この時代はヨーロッパで毛織物工業が興隆した時代で、パウ・ブラジルは貴重な染料だった。

②. 砂糖キビの時代（16世紀後半）

ヨーロッパで砂糖の需要が高まると、レシフェやサルバドールを中心とする大農園で、黒人奴隷輸入による砂糖キビ栽培が本格化し、大土地所有制度も定着した。しかし、17世紀後半、カリブ海での砂糖生産が開始されるとブラジルの砂糖産業は国際競争力を失った。

③. 金の時代（17世紀末～19世紀初頭）

17世紀の終わり頃、ミナス・ジェライス州で金鉱やダイヤモンドの鉱脈が発見され、空前のゴールドラッシュが巻き起こった。衰退した砂糖産業からの労働者、ポルトガルからの移民がブラジル中東部に殺到し、50万都市が出現した。リオデジャネイロはこの地域の外港として栄え、やがて首都となった。これらの都市の巨大人口の食料をまかなうため、サンパウロ以南や北東部は農業地帯となっていった。

④. コーヒーの時代（19世紀半ば～）

フランス領ギアナに移植されたコーヒーは、ちょうど金・ダイヤモンドが終わる頃、サンパウロそしてその南のパラナ州に広がっていった。この頃、ブラジルは帝政から連邦共和制になり、有力なコーヒーからの歳入が中央政府から州政府に移ったため、コーヒー栽培の中心としてサンパウロは強大な財力と政治力を持つに至った。

⑤. アマゾンのゴムブーム（19世紀後半）

ブラジル南部でコーヒー栽培が盛んに行われていた頃、北部のアマゾン川流域では野生ゴムが自動車のタイヤの原料として世界の注目を浴びていた。自動車の普及や近代工業化の中で、ゴムの需要は飛躍的に伸びて、ゴム産業は未曾有の繁栄をとげ、アマゾンの上流部にもマナオスという大都市が出現した。しかし、19世紀末、イギリス人がゴムの種子を持ち出し、東南アジアでの栽培に成功すると、アマゾンの野生ゴムの採集は大きな打撃を受け、同時にマナオスも衰退していった。

⑥. 鉄の時代（20世紀後半）

1954年に就任したクビチェック大統領は、外国資本と技術の導入により重工業化政策を押し進めた。良質で豊富な鉄鉱石と高い技術水準に支えられた鉄鋼業とともに自動車・造船工業は順調に成長し、自動車1966年国産化率99%を占め、造船も南半球最大の規模を持つに至った。しかし、ブラジリアへの遷都や急速な工業化の結果、財政に負担が生じて、経済の停滞と悪性インフレを引き起こしてしまった。

ブーム・アンド・バスト（boom and bust）を繰り返す熱帯農産品の生産は、ブラジル人に一獲千金的・投機的態度、投げやりな態度、行動様式を与えたといわれる。規則正しい労働は嫌悪された。ブラジルの農業はまた、約300年にわたって黒人奴隷に、そして奴隷解放後はヨーロッパその他からの新移民の労働によって担われてきたが、その過程で労働、とりわけ肉体労働を蔑視する価値観が生まれた。

小池洋一「ブラジル農業は変わる」

Ⅳ コーヒー産業の現状 —ブラジルを支えた嗜好品—

①. ブラジルのコーヒー生産の水平的移動

200年に近い歴史を持つブラジルのコーヒーであるが、その生産地帯は大きく変わっている。

栽培が始まったのは1730年頃にアマゾン河口地方であった。それが市場と栽培適地を求め南下し19世紀はじめにはリオデジャネイロ地方にまで達した。ブラジルの奴隷制が廃止された1888年頃にはリオデジャネイロ地方のコーヒー栽培は激減しやがてサンパウロ州がコーヒーの中心になっていく。ここにおいてコーヒーはテラロッシャと出合うことになる。第2次世界大戦後、コーヒー栽培地はパラナ州北部に移って行く。この頃のブラジルコーヒーは世界の70%以上のシェアを持ち、亜熱帯の新興コーヒー生産地が出現しても1950年代までは50%以下に落ちることはなかった。1975年の大霜害によってパラナ州の10億本といわれたコーヒーの木は半減し主産地はミナスジェライス州に移っていくが、同時にエスピリトサント州・バイア州と拡散を始めていく。これはコーヒー栽培が略奪農業の形を取るため、地力が落ちるとコーヒー園が新しい原野を求めて移動していくからである。

②ブラジルコーヒー生産の現状

現在、ブラジルのコーヒーは世界生産の3割、ブラジルの輸出額の5%以下でしかない。生産では現在でも世界一だが、売上高ではコロンビアに世界一を譲った。1袋(60kg)のコーヒーの価格がだいたい100USドルを切るとコスト割れと言われているが、現在の国際価格は70USドルぐらいで推移している(図2)。コーヒーの価格を安定させるためのICO(国際コーヒー機構)も3年前になくなり(中南米の国々が共産化しないためにコーヒーを買い支えた)、ブラジルのコーヒー生産を保護・指導していたブラジル政府のコーヒー院もコロール政権下でなくなった。

-----1990/91収穫年(7月1日～6月31日)のブラジルの収穫量-----

ブラジル全体	約2,200万袋	
ミナスジェライス州	950万袋	セラード地方が生産の中心
サンパウロ州	330万袋	アラビカ種
エスピリトサント州	450万袋	ロブスタ種中心
パラナ州	220万袋	アラビカ種
バイア州	100万袋	アラビカ種
その他の州	150万袋	

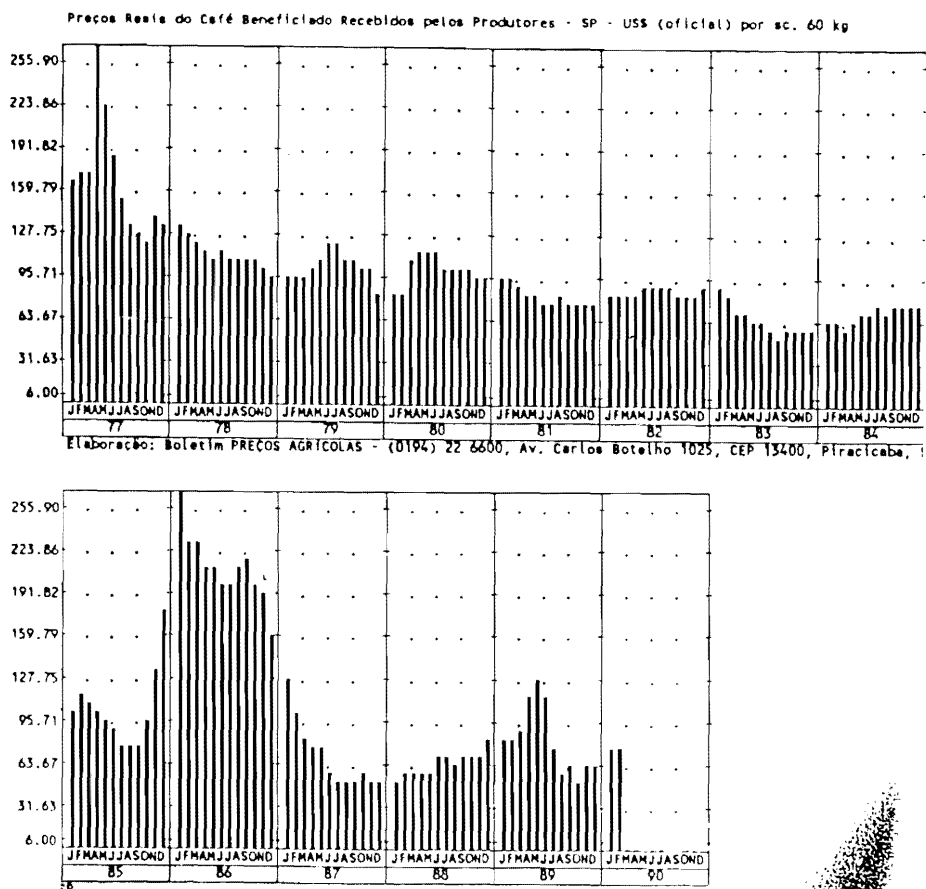
※1袋=60kg

※ロブスタ種：品質が悪く価格が安い、インスタントコーヒー用

ブラジルのコーヒー収穫は実を枝ごとしごいて地面に落とし、それを熊手のような物で集め、さらにザルに取って風選する(図3)。その過程で、未熟の実や土などが入って味を落とすため、あまり高い値段がつかない。一方、人件費の安い中米では、コーヒーは手で摘むので品質が高く、高値で取引される。ブラジルでは人件費がコストの20%を占めるため人件費を少なくするためこのような収穫方法を取らざるを得ない。また、機械で収穫する方法もあるが、30～50万本規模の大規模農家でないと採算的に見合わない。

いずれにしても、現在、コーヒーは生産過剰で国際価格がどんどん下がっており、コーヒー不況と言われている。

図2. コーヒーの国際価格の推移



③. コーヒーよもやまばなし

- コロンビアなどでコーヒー栽培が奨励されているのは、麻薬（コカイン）栽培を防止するためだそうだ。
- ブラジルのコーヒーは非水洗式といって、収穫後乾燥して果肉をはがすため、くせがなく、甘くマイルドなコーヒーになる。だからブラジルのコーヒーはブレンドのベースとしては欠かせない。
- 中米では水へ2～3日つけて果肉をふやけさせて取り除いてから、豆だけを乾燥させるので、酸味が出る。
- ジャマイカのコーヒーをブルーマウンテンというが、イギリス植民地時代に王室御用達というイメージで売ったので超高級コーヒーとなってしまった。90%日本が輸入しているが、味は他のコーヒーと全く変わらないそうだ。



図3. コーヒーの風選

V 日系人の社会と農業

①. 世界最大の日系人社会

ブラジルの日系人は混血もいれると 123 万人といわれており、その半がサンパウロ州、さらにその半がサンパウロ市に住んでいる。第 1 回移民は 1908 年の笠戸丸で上陸した 781 人である。コーヒー園のコロノとして一定期間を働いたのち日系移民たちは、自営開拓農として原始林を開拓していく。ほとんどの場合、これは集団で行われたために 1920 年代、各地に日系の植民地が建設された。この自営開拓農は大きく 2 種類に分類される。1 つはサンパウロから遠くはなれたところに広大な土地を購入し、コーヒー・綿・ピーナッツ・ラミー・ハッカ・まゆなどを単一栽培するもので奥地型農業と言われる。もう一つは近郊型農業で、バタタ（ジャガイモ）・トマテ（トマト）・鶏卵・果樹・蔬菜・花卉などをサンパウロ市近郊などで集約的に生産するもので、現在、サンパウロ州ではこの分野は日系人の独壇場と言って差し支えない。

1930 年代から農業協同組合が結成され、農産物の販売・生活物資の購入・栽培技術の向上・病院や学校の建設など農業だけでなく、生活全般について活動するようになった。現在、コチア、スール・ブラジル、サンパウロ中央会の 3 大組合は、その傘下に日系人以外のブラジル人組合員を多数擁して、全国の農業生産の中で大きな比重を占めている。また次第に、日系人で都市生活をするものも現れ、商工業で活躍し成功するものも現れてきた。

戦争中・戦後の混乱を終えると、二・三世が積極的にブラジル社会に溶け込み活躍する一方、新しい移民の導入、日本からの企業の移転により、日系コロニアは新しい時代を迎えることになる。現在のコロニアの話題は何と言っても出稼ぎで、約 17 万人が日本に来ているといわれる。

②. 黒木氏の場合（サンパウロ州サンロッケ市）

私がお世話になった黒木さんは、熊本の出身で戦後最初（昭和 31 年）の移民（コチア組合が呼び寄せたのでコチア青年と呼ばれた）で、4 年間日系の農場でコロノをやった後、結婚。今の農場の近くに土地を借り、ジャングルを開き、バタタ（ジャガイモ）を 5 年間作り、その後現在の土地を購入した。その間に 4 人の子供を育てた。現在の土地は 50ha で、斜面であり良い土地ではないが、電照菊を作っている。さらに奥地に入って広い農場をもち 100 ha 単位の農業をやっている人達は、現在かなり苦しい経営をしているらしい。その点、黒木さんのように花卉を作っている人達は、中・上流階級を相手に商売をしているので、経営は比較的安定していて今まで大きな失敗もなくやってきたという。このサンロッケは、サンパウロから車で西に 1 時間 30 分くらい行ったところにある小さな町で、1,000 m 以上の標高があるため涼しく、戦前からイタリア人が入植しブドウ栽培が行われた。

VI 私が見たブラジル

①. サンパウロ

- セントロ：サンパウロ市の中心（セントロ）であるが、治安が悪くなってきたため、大きな企業はパウリスタ通りに移っている。コジキ・物売りが多い。
- パウリスタ大通り：パウリスタ大通りとアウグスタ通りが交差する辺りがサンパウロのビジネス街で日系の南米銀行の本店がある。
- リベルダーデ地区：ガルボンブエノ通りを中心として日本人街が形成されている。看板なども漢字なので、日本の街を歩いているような錯覚に陥る。日本文化協会・移民資料館・各県の県人会もここに集まっている。出稼ぎで日本人が減ったため、韓国人街になりつつあるという話も。

②. リオデジャネイロ

リオデジャネイロは治安が非常に悪く、市内を歩き回るのはほとんどできなく、もっぱら観光バスで観光地を移動するだけだった。その中でもコパカバーナやイパネマの海岸は、世界を代表する観光地だけあって素晴らしかった。

真夏の正月 ブラジルは南半球なので、当然クリスマスも正月も真夏です。サンパウロのクリスマスは不景気だったせいもあって、意外にあっさりしていたのですが、リオデジャネイロの大晦日（聖夜フェイリア）は本当にすごかった。

リオデジャネイロという町はサンパウロの東 600 km の所にあるブラジルで 2 番目に大きい大都市であり港町であり、ブラジルの観光の中心です。ブラジルをあまり知らない人でも、リオのカーニバルぐらいは聞いたことがあるでしょう。

この町の名物は何と言っても、コパカバーナビーチとイパネマビーチ。真っ白い砂浜が何キロも続いている。このビーチに12月31日の夜になると数十万人の市民や観光客がシャンペンを持って集まってくる。巨大なスピーカーでカウントダウンが始まる。「クワトロ トレイス ドイス ウン ゼロ!」「フェリス アノ ノボ（明けましておめでとう）」と同時に花火が上げられる。みんなでシャンパンを抜いて、抱き合って、祝福のキスをして、そしてサンバで朝まで踊る。やはりブラジルの正月はサンバで始まるのでした。

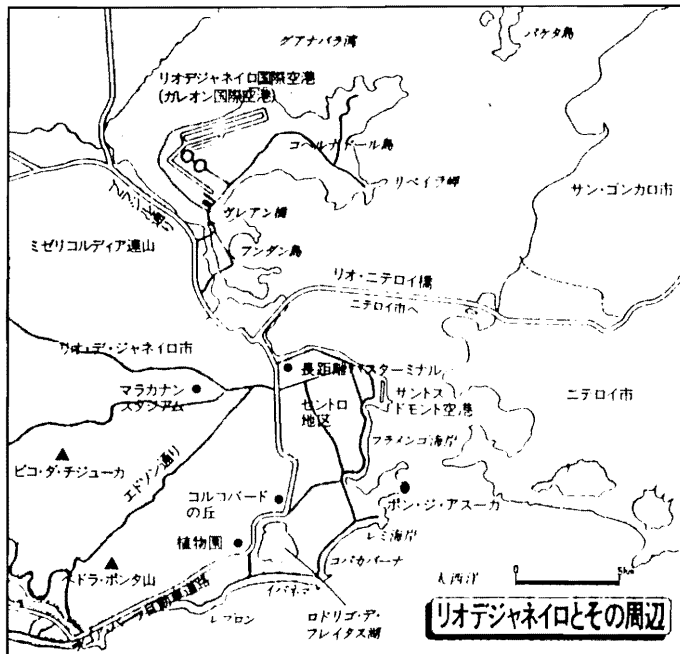
もう一つのリオの名物はコルコバートの丘に立つキリスト像である。コスメペーリョ通りから登山電車で登って行くと途中でファベイラ（貧民窟）を通る。標高 710 m の花崗岩の頂上にコンクリートのキリストが手を広げている。1931年に独立 100 年を記念して作られたもので、ここから見るリオの眺めは素晴らしい。

③. サントス

サンパウロの南東70キロのところにコーヒーの港サントスがある。コーヒーの輸出量が減った今は、かつてほどの賑わいはないが、いまでもブラジルのコーヒーの大半はここから出荷されるため、ネススル・三井などの商社の事務所がある。サンパウロと違い標高が低いため、蒸し暑く暮らしにくいそうだ。

④. フォス・ド・イグアス

パラナ川をかかる世界最大のイグアスの滝は、ブラジルとアルゼンチンの間にある。あまりに大き過ぎて飛行機から見ないとその全貌が見えないが、中心部の「悪魔ののどぶえ」までは両方



から歩いていくことができる。

このイグアスの滝の近くにあるブラジル側の町がフォス・ド・イグアスであるが、私はここへは行かずに、パラナ川を渡りパラグアイに買物にいった。パラグアイは外国からの輸入品に対して無関税なので、輸入品が格安値段で買えるため、ブラジルから多くの買物客が訪れていた。

